

報告概要

メガと一九世紀の経済恐慌についてのマルクスの研究

ティム・グラスマン

新マルクス・エンゲルス全集（メガ）が継続的に刊行されて、経済恐慌とその理論についてのマルクスの研究に関連する大量の新しい資料が利用可能となっており、今後さらに多くの材料が提供されることが期待される。これらの刊行物は、マルクスが身をもって体験したほとんどすべての恐慌を詳細に研究しようとした、彼の努力を明らかに示している。そのもっとも顕著な例が、世界規模での最初の経済恐慌が起きた一八五七年から五八年にかけて彼が作成した三冊の *Krisenhefte*（恐慌ノート）である。本報告の目的は、第一に、実際に生じた一九世紀の恐慌と恐慌理論のマルクスによる研究についての大まかな概観を与えることである。次に、一八四〇年代におけるマルクスの恐慌研究についてより立ち入った考察を加える。まず、マルクスの『パリ・ノート（経哲草稿）』（1844年）に書かれているジェームズ・ミルの『経済学綱要』についてのマルクスの評注（『ミル評注』）と、彼の『マンチェスター・ノート』（1845年）に収められているジョン・スチュアート・ミルの『経済学の若干の未決問題についての試論』からの抜粋とを比べてみて、古典派経済学の「一般的過剰生産論争」すなわち商品生産社会における過剰生産恐慌の（不）可能性をめぐる争いについての、マルクスのスタンスの変化を明らかにする。その上で、マルクスの『ロンドン・ノート』（1850年）におけるこの恐慌のさまざまな説明についての彼の検討に照らして、一八四七年恐慌についての彼の分析を再構成することを試みる。